天狗草紙考察

梅津次郎

一　序
二　名稱
三　製作の動機
四　概觀
五　卷名・卷數
六　卷次―構想
七　分段・錯簡―詞と繪の關係
八　奥書・添狀―筆數・年代・傳來
九　書入―畫家の位置
一〇　出典
一一　性質―歴史的位置
一二　結語

一　序

世に所謂天狗草紙なるものには、嘗て本誌第四十四號に於て望月信成氏が論考せられた是害房繪詞の一類等もあるが、今茲に問題とするのはかの南都北嶺以下の僧徒の憍慢なるを天狗に喩へて諷刺せる、普通單に天狗草紙と呼ばれるところの著名の一聯の繪卷を指す。此天狗草紙は現在帝室博物館その他に分藏せられて居り、調査研究に不便多きが爲めであらうか、その有名なるに比しては、從來これが論考の發表されたものに乏しい。管見の及ぶところでは、谷信一氏の「天狗草紙に就いて」國華四九六號所載を以て唯一とする。圖錄、辭書等の解説に至つては相當の數に昇るであらうが、多くは大同小異である中に、日本文學大辭典中の田中一松氏の簡明なる所説が獨り注目せられる位であつて、未だ開拓追及すべき餘地が多い。筆者はそれ等先行の所説の恩惠に浴しつゝ筆をとるが、想ひ出せば此繪卷に就いては、曾て根津家所藏卷の寫眞と詞書とが本誌第五十號に載せられ、筆者はその解説を擔當したのであつたが、當時つひに他卷の調査を遂げることを得ず、危險あるを慮つて之を云々することを避け、暫く時を藉ることにしたのであつた。爾來、筆者の疎懶の爲め遷延久しく、最近に至つて漸く全卷に亙る一應の調査を了ることが出來た。今にして此特異なる繪卷の含む多岐なる問題の解明の愈〻容易ならざるを自ら知るのであるが、この比較的未開拓なる繪卷に就いては、記載的なる調査報告それ自身が猶緊要のことに屬すると思はれるので、以下調査的記載を中心とし、一應の整理を試み、疑問は疑問として提出し、江湖の高教を仰ぐと共に、併せて公約の一部を果したいと思ふ。

二　名　稱

天狗草紙は、いま原本五卷、原本在否不明の摸本二卷が知られて居り、各卷は卷次を與へられることなく、夫々傳稱による卷名を持つてゐる。所在と共に列擧すれば、卽ち

興福寺卷（摸本）　帝室博物館藏
東大寺卷（摸本）　同　右
延曆寺卷　同　右
園城寺卷（或は三井寺卷）　侯爵　前田利爲氏藏
東寺醍醐高野卷　帝室博物館藏
三井寺卷　伯爵　久松定謨氏藏
三井寺卷　根津嘉一郎氏藏

之のみによつて見れば、七卷のうち三井寺卷が三卷もあつて、斯の如きことは普通には在り得ないことゝして、先づ疑はれるべきであるが、同時に一方に於ては初め果して幾卷の規模のものであつたかとの疑問も亦生じ得る。しかし乍ら、之等のうち最後の二卷の名稱は然か稱せらるべき理由は全くないのであつて、後世の鑑定家の誤つて附けた名に由來せるものであつて、それについては後に說くが、意外にも後人を誤ることが多かつたやうである。かゝる事情は一面此繪卷が古くから分散して、全卷を通覽することの出來なかつた事情に基くところが多いであらう。その間の事情は增訂考古畫譜や繪卷そのものゝ奧書によつて見ると、興福寺卷が興福寺維摩會繪詞、東大寺卷が東大寺戒壇繪詞、延曆寺卷が延曆寺繪詞或は同緣起、東寺卷が東寺緣起、根津家藏卷が佛外無魔繪詞などゝ各〻孤立せるものとしての名稱で呼ばれてゐたことのあるによつても窺はれる。而

二

して各卷が斯の如く孤立的にも見られたことは他面それ自身各卷の內容が獨立的性質を持つことを示すもので、その點から云ふと、普通の數卷一具をなす繪卷の各卷が連續的關係であるのに異つて、此繪卷は殆んど併立的關係に在り、卷次不明の原因となつてゐる。

尙天狗草紙全體に關する原名が何であつたかは不明で、倭錦は七ケ寺畫などとも稱してゐるが、後に明かなる如く、繪卷は單に七ケ寺を取扱つたものではない。又看聞御記永享三年四月十七日の條に「自內裏七天狗繪七卷被下云々」と見え、殊に壒囊鈔卷八天狗名目事の條に「八坂ノ寂仙上人遍融七天狗繪ト云事書レタレハ定テ由緖侍覽」とあり、考古畫譜は後者の文を引いて之を此繪卷に當てゝゐるが果して如何であらうか。

三　製作の動機

天狗草紙考察に當つて先づ注目せられるのは、知らるゝ如く、興福寺卷冒頭の詞書である。（別揭詞書參照）それは此繪卷の總序と見るべきものであつて、製作の動機、構想、年代等に直接間接に觸れてゐる。それによると、作者は、當代諸寺諸山の僧侶等は我寺の草創いづれも聖代明時の御願に出で勝劣なきに拘らず、各〻己が寺の由緖他寺に比なきを誇り、皆憍慢我執の外道に陷れる樣を嘆き、その有樣を天狗に喩へてあらはさんとして之を繪卷に仕立たものであると云ふ。こゝで作者はその製作の時を「于時永仁四年之天初冬十月之日也」と述べてゐる。作者は更に語をついで、慢に七種ありとなし、日本

國の天狗は結局この七類に歸著するとなし、興福、東大、蘭城(マヽ)、東寺、山臥、遁世の僧徒を以てそれにあてゝゐる。茲に七慢とは倶舍論に云ふ「論曰、且慢隨眠、差別有七、一慢、二過慢、三慢過慢、四我慢、五增上慢、六卑慢、七邪慢」の說に出るらしいが、(上掲谷氏論文參照)作者は之に暗示を得てかゝる天狗の七類を繪卷に作ることを企てたものと知られる。之によつて此繪卷が最初から現在知られてゐる如き七卷の繪卷であつたかとも粗〻想像されるかも知れぬ。

第一圖　延曆寺卷

然らば興福以下の七類が各卷に如何に配分されてゐるであらうか。傳稱による配分は帝室博物館藏既記の如くである。夫と之とは如何なる關係に持ち來たさるべきであらうか。我々は先づ全卷を一瞥する必要がある。

四　概觀

興福寺卷　(題簽「興福寺」、卷末ニ「御物文化十四年夏養信摸」トアリ。詞一段繪一段)

(詞)　前述の序文に引續いて、直ちに興福寺に關する部分に移る。本寺が藤原不比等の御願、代々攝政藤原家の氏寺なる由緒、法相宗三國相承の正しさ、南都六宗の長官たること、維摩會の由來とその嚴重の大會たることより鎭守春日明神、八幡大菩薩及吉野權現の本寺擁護を本寺衆徒が誇れるを敍し、その故に本寺衆徒の執心憍慢いよ〳〵甚く皆天狗となつて春日山に棲み熱惱の苦をうける。よつて春日明神これを憐み、晝夜三遍甘露の妙藥を彼等の口にそゝぎ給ふと結んでゐる。

(繪)　維摩會の盛儀の次第を羅列的に畫いたもの。(繪中に註記がある。今括弧を以てあらはす。以下同樣。)「維摩探題」の列が左方へ進みゆく樣より始まり、やがて「講堂」がある。堂前に「惣在聽」、「公文從威儀師」等が既に到著してゐる。つゞいて輿に乘つた「維摩講師」の行列が講堂に向つてくる。(講師の口が嘴となつてゐる)ついで「金堂」があり、裏頭の法師等が堂前に群集して神木入洛のことを議してゐる。ついで「維摩會延年舞」の樣が畫かれ、續いて鹿の居る池畔より遙かに春日山の社頭が描かれ、鴉天狗が三羽僧服の明神から口に甘露をそゝがれてゐる。更に「維摩會勅使」到著の場となつて終る。

東大寺卷　(題簽「東大寺」、卷末ニ「養信摸」トアリ。詞一段繪一段)

(詞)　本寺が四聖共成の所、八宗兼學の道場、金鷲童子の宿願に

第二圖　東寺卷（大和繪同好會複製より）

よる伽藍建立の由來、八宗講筵の盛大、我朝最初の戒壇、閻浮第一の伽藍、千葉の毘盧舍那を本寺の僧が誇るを述べ、その憍慢我執によつて皆天狗となると結ぶ。

（繪）先づ鐘樓あり、法衣を著た鴉天狗二人鐘をついてゐる。その手前に「七重塔」上層、ついで「大佛殿」正面、大佛の蓮座が僅かに見えて上方は見えず。佛前に二人禮拜。

續いて斜めに廻廊あり、その外側に衆徒集り「天下の沙彌たれか此戒をうけすして法蔕をさためむや」などゝ云つてゐる。又廻廊あつて「戒壇院」がある。前庭に嘴ある僧二人その他。

延暦寺卷　題簽及見返部ニ各「延暦寺」トアリ。共ニ後書。詞一段　繪一段

（詞）本寺が桓武天皇の御願なること、傳敎大師草創に纏る奇瑞、大師の唐土に於ける求法、及び歸朝後の活動等を糾ひ述べ、ついで慈覺大師の事蹟に至り、更に相次いで當山に輩出せる高僧の效驗に及び、鎭守山王の禮讃より當山の風光の明媚、天台宗の尊貴を誇り、終りは「なかにも御廟の先德慈惠は佛法擁護のため魔界の棟梁とし地主二の宮權現は天狗をもて使者とし給ふかるかゆへに一切天狗みな我山の徒衆□廟の伴黨なるものをや」に終つてゐる。

（繪）まづ水邊に水屋の如き一屋あり、やがて二重樓門の廻廊あり上に「□禪師」と註あり。門外に裏頭の法師等居る。廻廊の外に山あり、そこに塔婆垣をめぐらして鳥居門ある一神殿。續いて又樓門、廻廊の內外に數匹の猿が遊ぶ。やがて杉林の山間となり段階の經路、一僧黑き箱を負ふて登る。ついで「□（女カ）殊樓」がある。その左に一殿、法師童子等が見える。中門ありやがて又一屋あり。次に綠の山を隔てゝ「三塔會合僉義」の場。中央に一殿その右に鐘樓、殿前に裏頭の法師等群集し園城寺燒打のことなどを議してゐる。ついで山々の間に寶塔社殿等の屋根あり、「惣持院」の前に鴉天狗の嘴したる法師童子等、山の彼方に天狗形の法師數人。次に山又山がつゞき寶塔寺閣の屋根が霞の中に見え、卷末祖師の塔廟ありて終る。

帝室博物館藏

園城寺卷 見返部に「第三卷園城寺」ト並書キ、ソノ裏ニ又「第三卷」トアリ。詞一段 繪一段

（詞） 本寺は天智天武二代の勅願敎待智證兩祖の聖跡なる由より說き起し、草創の奇瑞、智證の事蹟より、歷代皇室との因緣深きこと、ついで當寺の所學が顯密二宗に修驗の一道を兼ねること他に比なきを述べ、更に所在の風景の美を誇つて、終りに「眼にさへぎる色耳にみてる聲執心をまし憍慢をもよをすゆへにしかしながら魔道の果をなし天狗の因をうゑ侍ことそのゆへかくのごとくならむかし」と結んでゐる。

（繪） 「唐院三十講」の場面に始まる。堂上に僧侶が列座し、階上、前庭に裹頭の法師集ふ。下端に門の屋根見ゆ。ついで塀を隔て直ちに一宇あり。その前に僧俗童子座して、前をゆく騎馬の行列を見送る。堂の左に「□月三日講堂前」と註あり、ついで大堂宇の基壇正面となる。壇上に法師群坐し、壇下、階段の右に七人の僧盛裝し前に太鼓を置いて坐す。僧二人堂の階段に向ふ。騎馬の列はその前を通つて左に向つてゐる。騎馬三、右より左へ狩裝束のもの、甲冑のもの、朱袍に山鳥の尾をつけた蘭笠を冠るもの。徒士の從者數人。やがて樓門廻廊あり石段上に立つ。廊中に法師多く見物す。廊をへだて丶「金堂」あり、正面に法師群集して戒壇建立につき山門の妨害の非を鳴らしてゐる。又廻廊あつて、その外側に井戸あり、その前に翅ある鴉天狗二羽嘴ある僧と語る。ついで鐘樓あり「龍宮城鐘也」と註。

東寺卷 見返ニ「東寺醍醐高野」ト竝記、後書ナリ。詞一段 繪一段

（詞） 東寺を始め高野、仁和、醍醐の眞言宗の四ヶ寺について述べてゐる。先づ東寺は嵯峨天皇鴻臚館を弘法大師に施入し給へるに始まる鎭護國家の道場たる由より、大師が龍樹の後身たること、その諸事蹟、高野山經營。ついで益信、聖寶の時各仁和寺、醍醐寺を創建し、夫々皇室との因緣深く、又寺格の高きを述べ、その故に門徒の我慢ならびなく「中古よりこのかたの長者座主等もおほく皆こ

の界の主領となる事侍となむ傳侍こそ利益衆生まち〳〵なる方便にやとおほえ侍れ」と結んでゐる。

（繪）まづ金堂らしき建物の下半が斜に描かれ、僧一人その正面基壇上に默座してゐる。「東寺」と註す。ついで仁王門。門脇に繪馬を賣る女、僧二人。又仁王門あり下郎等休息してゐる。門前田圃開らけ、荷馬を追ふ童子等あり。やがて小丘を隔てゝ檜皮門、築地をめぐらす一殿堂ありて人なし。又小丘を隔てゝやがて櫻咲くところ舞樂の場面。「醍醐櫻會」と註。壇上に童子舞ひ、頭巾の法師、俗衆等多く見物す。天幕を張り樂人奏樂のところあり。青霞山間をすぎて一祠あり「清瀧」と註す。やがて又霞、山あり「高野山」と註す。「大塔」「御影堂」「三鈷松」等あり。圖は霞につゞいて「天軸山」あり、やがて塔婆立並ぶ山路となり、小溪ありて橋かゝり「奥院」の建物ありて終る。最後に「摩尼山」と註す。圖中に天狗の姿を見ない。

傳三井寺卷　詞五段繪五段

久松家藏

本卷は五つの話から成つてゐる　段の順序に疑問あり、後述

第一段

（詞）「近頃」三井寺に天下に名高き碩學四人あり。或學生睡眠中にその心神飛行してその一人智嚴房のもとにゆき鼻を切られ、遺恨ふかく思つてゐたが、その後他の一人圓藏房のもとに行つたところ今度は刀のかね惡くて圓藏房は切ることが出來なかつた。よつて圓藏房は屢〻惱まされたと云ふ話。

（繪）智嚴房が小刀で明障子の向ふから窺ふものゝ鼻を切るところ。ついで山の上を鼻を切られた僧衣の鴉天狗が飛行して逃げゆくところ。やがて一坊あり、一室にうたゝねの僧が鼻をおさへて半身を起してゐるところに終る。

第二段

（詞）或る聖ひとへに極樂をねがつて彌陀の來迎をうけたが、雲外を過ぎゆくまゝに聖衆おもひの外に輕躁となり、面相異體に變つて、僧を高木の梢にかけたまゝ消え失せてしまつた。二三日を經て或俗人が鷹の巢をおろさうとして深山に入ると梢に人の叫ぶ聲がするので登つて見ると件の僧であつたと云ふ話。

（繪）草堂の緣側に僧合掌念佛す。侍僧二人。そこへ聖衆山越に來迎する場。山はつゞいて黑雲に乘つた鴉天狗の群が件の僧を捧げて山上を飛び行くところ。やがて山中の樹の上から僧が繩につけて降ろされるところ。懸崖の老松に鷹が一羽とまつてゐる。

第三段

（詞）丹波國篠村の僧が深山に迷ひ入つたところ、天狗共が佛法を障碍せんものと種々劃策し、衆議一決退散せるを見たと云ふ話。

（繪）一僧山路に入る。山は續いてやがて一樹の洞に僧がかくれて窺つてゐる場があり山伏僧形の天狗共圓座してゐるところに終る。

第四段

（詞）「其後」いくほどもなくして世間に異樣の振舞する輩が多く見え來つたとて、一向衆や放下僧等の見苦しき振舞の樣を述べ、禪

宗のために宋國は亡んだと云ふ。

（繪）　先づ多くの僧達飯櫃よりつかみ食ひなどする狼藉の場面、ついで時宗僧等が「天狗長老一遍房」を中心に圓舞法樂の様。上空より鴉天狗が華を降らし俗衆が仰ぎ見てゐる。つゞいて轅の車の群衆するところ。俗衆が多く集り、一遍をとりまいてその小水を乞ふ様あり。「自然居士」その他放下僧が様々の身裝身振りで歌ふ様が描かれてゐる。

第五段

（詞）「かくの如く」天狗處々道場にいたりて異曲をわかし凶害をなす故、人多く邪見に住して愚儀を專らにするやうになつた。天狗共してやつたりと思ひ込み、こゝかしこに遊行し興宴してゐたが、或天狗肉食せんとして四條河原に出て、遂に穢多童子の針にかゝつて命をとられた。之を聞いて日頃懇にせる垂髮の天狗はまろび悲しみ、古寺の梢に音をのみぞ泣いてゐたと云ふ話。

（繪）　古寺の縁に苦しげに臥す垂髮の女房（カ）を介抱せる僧。前庭に天狗共興宴の様あり。上方に形見の羽を見て泣く垂髮。やがてくづれたる築土塀あり、外に河流れ、その畔に童子肉を投げ、鳶上空よりそれを窺ふところ。續いて童子鳶の首を締めるところ、やがて天狗共管絃の場ありて終る。

傳三井寺卷　詞二段　繪一段　　根津家藏

（詞第一段）「か様に」はかなき事が出で來たつたので、さすが天狗も世の憂きことを知り、邪執を飜へし憍慢を倒して面々にまことの心を起しあひ、淨土、天台、華嚴、法相、禪、眞言等の諸天狗は次々に自宗の教義に從つて成佛せんと述べれば、最後に天狗の長老が面〻に猶未だ我執が殘つてゐる、所詮いづれの教にても急ぎ精進修行して我身の無常を觀じ、生死の本源に達せよと云ふ。よつて諸天狗各本所學の法によつて修行に志し、堂舍塔廟を建立し了因の種子を植えた。

（繪第一段）　天狗共一堂に會する場。僧形、修驗者の姿にて皆嘴あり。「□宗法燈顯密棟梁」「華嚴宗匠」「得法禪師」「三論學頭」「法相碩德」「三山檢校」「持戒律師」「念佛上人」「愛宕護太郎房」「天台貫主」等と註す。續いて建築工作の場。鴉天狗や嘴ある者共混じて働く。その手前に僧二人女一人、蓮華王院燒失のことにつき泣く。ついで一堂に僧集會し、中央に如意を持つ高僧講義の體。次ぎに一屋あり、中に頭巾の僧椅子に默座。又一宇あり、圓相中に一僧膝上に印を結んで蓮座上に趺坐する姿を表はす。

（詞第二段）　慢、魔界、天狗等についての經典の所説を述べ、かくの如く發心せるを以て、天狗の面々本所學の法により夫〻成佛得脱した由を述べてゐる。

五　卷名・卷數

以上七卷に亙る概觀を終へて、吾々は多くの疑問を提出し、解釋しなければならぬが、先づ冒頭に問題とした卷名の整理から始める。各卷の內容を檢する時、詞と繪との間に齟齬する點はないが、內

容と名稱との間に於ては、三井寺卷と稱せられる三卷に疑問がある。先にも云つた如く天狗の七類を現はした、大體七卷を以て完結すると思はれる繪に於て三井寺の一類が三卷を占むることとそれ自身が元來不釣合であり、不合理であることは明かである。しかも現に概觀したことでも明かなる如く、各卷はそれ〳〵を以て大體完結してゐるに於ては尙更である。

今この三卷に就いて見る時、先づ前田家藏卷一卷に於て三井寺卷が完結してゐることは云ふ迄もない。卽ち三井寺はこの一卷のみである。

然らば他の二卷は何の卷であるか。總序中の七類より之を當てやうとするならば、山臥、遁世を考へるより他はないが、從來多く山臥遁世は增訂考古畫譜の所說以來醍醐高野と思はれてゐた。しかし山臥が醍醐であり、遁世が高野であるべき理由は少しもないのであつて、かゝる說の由來するところは恐らく東寺卷に醍醐高野のことが併せ說かれて居り、且つ同卷見返のところに後人の筆で「東寺、醍醐、高野」と竝記されゐることから思ひついたに過ぎない。又一方此一卷に東寺山臥遁世の三類が書かれてしまつては七類は五卷に收まつて久松家藏卷などは全然別本とも考へなければならなくなる。東寺卷は東寺をはじめとして、高野、仁和、醍醐等の眞言宗の一流を敍したものであつて、想ふに作者はそれ等を「東寺」なる名のもとに一括して說いてゐると見るのが眞相である。從つて斯卷は單に東寺卷と呼べばよい。却說、もとにかへつて、かの二卷のうち、根津家本に就くに、之は諸天狗の成佛を說いて居り、全卷を總收する結卷としての內容を備へるもので、山臥にも遁世にも歸し得ないものと思はれる。とすれば殘るは久松家の一卷のみとなるが、果して此一卷が山臥遁世の二類を包攝し得てゐるか否かは問題であらう。斯卷は卷頭に三井寺の僧の一挿話があるので三井寺卷と間違はれたらしいが、その內容は他の四段に於て淨土僧、一向衆（時宗）、放下僧（禪）等の行狀に關する主として新興諸宗に向けられた一卷である。之を先づは遁世にあてることは出來ても、山臥をも含ませて考へることは困難であらう。山臥は僅かに佛法障碍を謀議する繪中に出るのみである。

こゝに山臥の卷が在つたか、無かつたかの問題が生ずる。若し在つたとすればもと八卷あつたことになるが、恐らくは此繪卷を指すと考へられる前引看聞御記の「七天狗繪七卷」の文字は如何に解釋され得るか。之は八と七の誤りであるか。若しくは當時既に山臥卷はなかつたか。又退いて考へるに、八の數字は必ずしも吾々にとつて難有くない。先にも述べた如く七天狗は佛典七慢の說に出づるもので、製作者は七を以て又卷數となしたかと思はれる節もある。現に石山寺緣起の三十三の分段が觀音の三十三應身を象徵したと解せられる例もある。御記の七を上の如く解することは些か牽强でもある。

若し最初から七卷であつたとすれば、しかも山臥卷に關する部分もあつたとすれば、果して現在の七卷の形態に何等かの變改を加へ

て整理し得るであらうか。長さの上から云へば現在の東大寺卷及園城寺卷（前田家藏）の兩卷が他と相當の開きがあり、東大寺卷は別として後者はその詞書に顯、密、修驗三道兼ね備ふるは本寺のみとあることから、之に併合せしむべきかとも考へられるが、果して如何であらうか。それは後に殘されるべき問題である。

唯こゝに一言云つて置きたいのは、現在在否を知るに由ないが、山伏の天狗を題材とせる繪卷が、大震災前、（年不明）兩國にあつた東京美術倶樂部に於ける伊達男爵家賣立に出てゐることである。目錄の圖版は不鮮明であるが、時代は永仁迄遡り得ず、別本であるらしいが、何れにせよ切に知りたく、若し所在を知らるゝ人あらば御一報を希望する次第である。

六　卷次——構想

概觀せるところによつて知られる如く、此繪卷の各卷の多くは內容的に孤立して居り相互間に必然的な連續關係を示してゐないものが多い。

しかし乍ら序列を持たない繪卷はない。前田家藏卷の詞書第一紙の前にある原初の一紙には「第三卷」「園城寺」とあり、更にその紙の裏面には又「第三卷」と同筆の墨書がある、それが最初からのものかは別として、相當の古い時代の筆跡であつて、その時代に考へられた全卷に對する本卷の卷次を示すものと考へられる。原初より卷次は與へられてゐたに違ひない。今それを考定することが出來るであらうか。前節に疑問とした山臥に關する部分の形體が不明であることは、考察を進める上に甚だ不都合である。そは暫くおいて、現存七卷に就いて考へる。

興福寺卷は冒頭に總序を伴ふことによつて當然第一卷である。根津家藏卷は先にも述べた如く諸天狗成佛のことを敍べて居り、必然結尾の第七卷と見るべきである。而して此根津家藏卷冒頭の詞書「か樣にはかなきこと出來ければさすが天狗も岩木ならねば」云々が承けてゐる事柄は、久松家藏卷第五段でなければならぬ。卽ちその詞書は天狗が穢多童子に取殺された話であり、その繪の最後の方には既に諸天狗が、集つて世の無常を謠つてゐる管絃の場がある。之は根津家藏卷に緊密に連絡するもので、斯卷が第六卷でなければならぬことを示してゐる。先づ以上の順序は最も明白であるが、他卷に至つては如何。それ等は一見全く併立する卷々である。

しかし主題から見る時、東大寺卷は、歷史的位置、及地理的位置から興福寺卷と最も近接すべきことが考へられ、延曆寺卷は同樣園城寺卷と近接すべきことが考へられる。卽ち之等四卷は二卷づゝ對をなして考へ得るが、他面詞書の形式上から見る時も同樣のことが云へる。卽ち興福寺卷の興福寺に關する部分及東大寺卷の冒頭は「興福寺（東大寺）の衆徒のおもへらく（おもはく）」に始つてゐるが、延曆、園城兩卷は直ちに「延曆寺（園城寺）は」に始つてゐることが一つ。更に前二者は兩寺の僧の誇る言葉が大體第一人稱で書かれ、結末に於いて作者が第三者の立場から、從つて彼等が天狗にな

るのは尤だと云ふ風に結んでゐるが、後の二者はその關係が甚だ不明瞭になつてゐることがその二、第三には後二者は文中に「云々」なる文字があつて直接引用的なる部分があるが、前者にはそれがない。之等の詞書の形式上の特徴それ自身は或ひは詞書作者の一人でないこと、資料の多寡、ひいては作者それ自身をも暗示するものであるかも知れぬ。しかしそれはそれであつても、四卷を二つの對として考へることは差支ない。然らば東大は興福に近接せるものとして、第二卷であるとの考定は比較的自然に出來る。

茲に於いて、興福寺卷序文中に云ふ。興福、東大、延曆、園城、東寺、山臥、遁世の順序を想起する時、上來考定し來つた卷次に關する限りは概ね之に合致するものである。而して此順序に從つて、更に延曆、園城、東寺卷に夫〻第三、第四、第五の卷次を與へることは、先の觀察に從ふも必ずしも不自然ではない。こゝで又問題となるのは園城寺卷にある「第三卷」の書入である。しかし之は後人の書入として無視することが出來るかも知れぬ。

此順序に從ふ時、殘る問題は「山臥」である。吾々は茲に再び前節に於て解決し得なかつた疑問に逢着する。「山臥」を園城寺卷に包括せしめ、現在の同卷の不足分を以てそれに當てゐることによつて、卷次に關する疑問は理論的には一應解決せしめ得るやうでもある。しかしそれが果して事實であつたと見るのは、恐らく自然ではない。又「山臥」が獨立した一卷であつたとすれば、「七卷」であつたのを最も自然とする考へからすれば、根津家藏卷は當然御記の永享以後の補作であると見なければならぬが、後に考察するが如く斯卷の繪は他本と同筆であつて、決して後世の作ではないのである。

七　分段・錯簡—詞と繪の關係

「山臥」に關する疑問は疑問として、扨て此繪卷の現在の形式は尚多くの疑問を生む。

各卷が獨立的形式をとつてゐることに關しては、その內容から見て別に不思議はないが、現在の七卷のうち詞繪各五段を持つ久松家藏卷、詞二段繪一段の根津家藏卷に對し、他はすべて詞一段繪一段の形式になつて居る。普通の繪卷形式から考へる時、かゝる事實は異例であつて、其處では現狀が果して原初の形であるか、換言すれば、分段の可能の有無が先づ問題となる。

先づ一卷一段の形式を有する五卷より考察するに、各卷の詞書はその一段のうちに明瞭に首尾を存し途中に於ても明瞭に缺脫を指摘し得る箇所はない。其處には文章の脈絡往々混亂を示し、殊に延曆園城兩卷に於て甚しいものはあるが、紙繼箇處に於ける文章の連續に特に不明瞭若しくは不自然なる點がなく、數段に分ち得るものではない。而して之に對應する繪に於ても亦紙繼の間に缺失を指摘し得る箇處はなく總て連續してゐる。若し缺失あらばその前後に於て考ふべきである。之に關聯して考ふべきは各卷の長さの比較である。試みに左に掲ぐれば

興福寺卷　一一・五〇三米

東大寺卷	四・七〇〇
延暦寺卷	一一・九六九
園城寺卷	七・四八九
東寺卷	一一・四九四
久松家藏卷	一二・九三一
根津家藏卷	一〇・三〇一

右のうち興福東大の二卷はもとより摸本によるものであるが、共に文化十四年狩野養信の摸寫にかゝり、敷寫しの體を具へ、粗當時の原本の姿を傳へてゐるものと察せられる。又後述するが如く延暦寺卷の詞書全部は後世の補寫と見られるが、之亦或程度原本の趣を傳へるものがある。よつて長さの考察に關する限り、之等の法量も大なる支障はない。さて各卷を比較する時、數卷に亙る繪卷が多少の差はあれ、各卷大體等しい長さを持つことを原則とするに顧みれば、疑問の生ずるのは自づから東大園城の兩卷である。繪樣から見る時、缺失あらば兩卷共主として前に續く部分であらうと推測され得る。興福、延暦、東寺の三卷の繪については、その全長から推して、又その繪樣から考へて殆ど全く缺失を認め難い。

更に先に保留せる久松家、根津家の兩卷について見るに、後者に於ては缺失の疑ひなく、形式的にも原初のものと見る他はない。久松家藏卷に至つてはその長さより見て現在より多くの段落があつたとは考へ得ないが、各段の序列が問題となる。卽ち現在の第三段は天狗が佛法衰滅を謀議せる段であつて、此一卷の構成上より見る時、發端の第一段として考へらるべきで、現在の第一段三井寺僧天狗に鼻を切らるゝ話及第二段念佛僧天狗に迎接せらるゝ話の兩段はともかくもそれ以後に置かるべきものであらう。そこで現在の第三段（原第一段）に續くべきものは「其後いくほどもなくして」世間に一向衆、放下僧等異樣の振舞をなす輩が出で來つたと云ふ現在の第四段でなければならず、又現第五段は諸天狗が將に發心に入らんとする過程に及んで居り、次卷に聯絡するものであるから、之はそのまゝ現在の如く最終の第五段である。從つて現第一、第二段は現第四段第五段の間に原初位置したものと考へられるのである。本卷をかくの如く整理することによつて、現狀のまゝでは殆ど單にばら〳〵な各段の內に一つの統一が持ち來たされ、全卷に亙る構想をも更に緊密な形に於て理解し得ることゝなる。

扨て、以上の考察によつて、最初に吾々が疑問とした此繪卷の現在の分段の形式は、久松家藏卷の錯簡を除いては他に整理の方法がない。卽ち吾々は此異樣の形式を原初よりのものと斷定せざるを得ない。

然し乍ら、吾々はかゝる異常なる形式を、それとして承認するためには何故かゝる事態が生じたかの解釋を必要とする。それを解くためには上に試みたやうな形態的側面からではなく、內容的側面からの考察が必要である。

先づ一卷一段の五卷に就いて見るに、各卷の詞書は各寺の緣起を中心として僧侶が憍慢となり、天狗となり終つたところの「因」を說明してゐるに對し、繪は各寺の境內乃至環境を背景として（其處

第三圖　東寺卷詞書　（大和繪同好會複製より）

に僅かに詞書の因の説明があるが）僧侶が如何に憍慢であるかの事實（「果」）を説明してゐるのである。卽ち詞と繪との間には截然たる因と果との區別があるのであつて、夫々に統一を持つてゐる。このことは最初からかゝる明確なる企劃として立てられたことを示すものであつて、そこには形態を克服するだけの理由がある。かく解釋しなければ繪が詞書の緣起文的內容に無關心であることの説明がつかない。このことは各卷がその緣起文的內容にもかゝはらずそれが普通の緣起繪卷的分段を持たなかつた理由にもなる。云ふ迄もなく因果の思想は當代に最も普遍的なものであるが、此繪卷の序文を再讀しても筆者はかゝる解釋に矛盾を感じない。

以上の五卷が古宗派の天狗を取扱へるに對し、久松家藏卷は主として新興宗派の天狗に關するものであるが、その第五段は「報」より發心に至る過程の一段であり、更に根津家藏卷は「成佛」の一卷として理解されるべきことは既に説いた通りである。

吾々は以上の考察を經て初めて、此繪卷の形態的異常を理解し得ると思ふのである。

八　奥書・添狀—筆數・年代・傳來

上來考察し來つたところによつて、一通り形態に關する整理を終つたことゝして、更に筆跡及畫跡そのものに就いての觀察に移らねばならぬ。今、各卷には古人の奥書、添狀等が附屬して居り、それ等は直接筆者に就いてのみならず、各卷の傳來、卷名の誤傳等に關しても興味があるから、先づ全文を揭げる。傳來については、奥書添狀等それ自身が示してゐるから、特に述べないが、興福東大兩卷は曾て柳營に在つたことが知られ、根津家卷は秋元家舊藏に係るものである。尙添狀等の書式は便宜變更した。

興福寺卷（摸本に據る）

（奥書）

右之繪詞光嚴院之震翰（ママ）無疑貼者也

權大納言藤原光廣謹記之（花押）

東大寺卷（摸本に據る）

（奥書）

右之繪之詞光嚴院之震筆（ママ）無疑貼者也

權大納言藤原光廣謹記之（花押）

延曆寺卷

（奥書）

此延曆寺緣起一軸者、土佐將監光信畫圖焉、妙非庸流之所及也、遂授筆

第四圖　園城寺卷（前田家藏）詞書

解他日之惑云

寛文戊申年陽月下澣　　狩野法印探幽（印）

（添狀）

延暦寺之縁起繪詞書者、青蓮院殿尊道法親王花翰、外題者曼殊院殿良恕法親王眞跡無狐疑者也、一筆重之況二美備乎、可謂聯璧、諶巾一襲之家珍也

寛文八年蕤賓上浣　　畠山牛庵　隨世（印）

（添狀）

青蓮院尊道親王延暦寺縁起繪卷物詞願傳教大師より墨付三枚　青蓮院尊純親王發端之一行十六字書足し、内書延暦寺之三字

青蓮院尊傳親王禪法をと云より墨付三枚　曼殊院良恕親王表之外題　狩野探幽齋守信奥書年號名印共

各芳翰無疑者也

仲冬　　古筆了仲（印）

園城寺卷

明治廿九年日本美術協會發行の土佐行光筆となす「鑑定證」一通を存するのみ。

東寺卷

（奥書）

此東寺縁起一軸者、土佐將監光信之所圖也、筆精墨妙誰敢聽氷哉、於是漫書一言於紙末云

寛文八年初冬十月下澣　　宮内卿法印探幽（印）

（添狀）

東寺縁起繪之詞書者、壬生二品家隆卿花翰、卷之内書付、青蓮院殿尊純法親王遺墨、共無疑似者也、貴命不能峻拒倩筆舌證之而已

寛文八年蕤賓下旬　　法橋牛庵隨世（印）

（同）

壬生二位家隆卿東寺縁起繪卷物詞東寺はと云より墨付四枚　青蓮院尊純親王外題内書共　狩野探幽齋守信奥書年號名印共　各芳翰無疑者也

仲冬　　古筆了仲（印）

久松家藏卷

（添狀）

天狗草紙　壹卷　詞書行尹卿　繪土佐越前守行光筆

享和元酉年六月　　板谷桂意廣長（花押）

（極札）

世尊寺殿行尹卿　繪草紙詞書近比三井寺に　一卷　墨印　琴山

〔註〕他に八十八宛了意手紙一通あり。

尚帝室博物館摸本には「七ヶ寺之内三井寺之卷詞世尊寺行尹卿、牛庵極繪越前守行光、原本松山家藏板谷藏」の奥書が有る。今牛庵の極書はないが、延暦寺卷東寺卷と共に牛庵が經眼してゐることは興味がある。

根津家藏卷

第五圖　傳三井寺卷（根津家藏）詞書（第一段）

第六圖　同　右（第二段）

（添狀）

天狗繪卷物詞書世尊寺殿行尹卿、轉法輪殿公忠公御兩筆無疑者也

金子參枚　　古筆了仲（印）

元祿八年文月中旬

（同）

天狗草紙三井寺之部　壹卷　右者越前守土佐行光眞筆無疑者也

明治十七年　　山名貫義（印）

右による詞書筆者の年代を考へるに既に考古畫譜の云へる如く

光嚴院（興福、東大兩卷）　正平十九年薨五十二歲

青蓮院尊道親王（延曆寺卷）　應永十年薨七十二歲

壬生家隆（東寺卷）　嘉禎三年薨八十歲

世尊寺行尹（久松家藏卷　根津家第一段）　正平五年薨

三條公忠（根津家藏卷第二段）　弘和三年薨六十歲

となり、年代甚だしく相違して、序文中に云へる此繪卷製作の永仁四年に執筆可能なる人は無いのであつて、例によつて古人の鑑定の疑義多きを示すのである。如斯、今それ等の鑑識に多く拘る必要はないが、果して各卷の詞書が永仁四年の筆跡と見做し得るや否や。此問ひに對して總てに亙つて斷定的見解を述べることは專門でない筆者のなし得るところではないが、延曆寺卷の詞書料紙全部は後補と認められる。その狀態を觀察するに墨付七枚の內第三、五、六の三紙は後補であり、更に第一紙第一行始め十字、その他二箇所程破損部に補筆がある。しかし、補紙の體裁を具へざる他の第一、二、四、七の四紙も他卷と異り料紙に雲母引がなく、粗面を呈し、筆跡亦拙劣である。唯筆跡が幾分原本に據つたらしい形跡がある點で全

部に亙る入墨と見られるかも知れぬが、先づ全部を後世の補寫を考へるのが至當である。而してこの補寫の年代に就いては前掲牛庵添狀がこの少くとも明瞭に二筆に分れる詞書を一筆に鑑して居るに對し、了仲の添狀が幾分齟齬するものあるにしても粗〻現狀に卽する鑑定をなしてゐることによつて大體寛文以後了仲以前にあることを推し得るのではあるまいか。

尙詞書に關しては園城寺卷が他卷が白紙を料紙とするに對して上下に打曇りある料紙に書かれて居り、他に例を見ないことゝして、それが後世の摸寫ではないかとの疑も亦一應は生ずる譯である。若し果して然らば、前記延曆寺卷と共にその詞書は或ひは後世の補作ではないかとの疑ひも亦起らなければならない。今兩者の詞書內容を檢するとき、前にも指摘せる如く、兩者は敍述の形式を等しくして他卷と異る趣があつて、更に兩卷同時の補作ならざるやの疑念を生ぜしむるかも知れぬ。しかし乍ら、打曇ある料紙は、之と左程時代を異にしない淺野侯爵家藏枕草紙繪卷や尾張德川家藏物語繪卷等にも例を見るのであつて、園城寺卷が料紙を異にすると云ふのみでは、積極的に摸本說を建てる論據とはなし難く、筆跡から見ても永仁當時のものとして差支あるとは考へ得ない。延曆寺卷にしても必ずしも補作と判定し得る根據はない。文體そのものも時代的に異るとは一寸思へない。

詞書に關する疑問は以上に止まり、他に關して年代的疑問は恐らくない。それ等の精細なる考察は專門家に讓り、幾筆に分れるかを云へば、園城、東寺、久松家藏各卷は夫々筆を異にして各一筆、根津家藏卷は第一段第二段異筆であり、第一段は久松家卷に似て同一筆者に鑑せられてゐるが、先づ異筆と見られ、かくて園城以下の四卷は五筆に分かれる。挿圖參照

繪の筆者に關しては、前掲鑑定は園城寺卷、久松家、根津家藏卷は共に土佐行光に、延曆、東寺兩卷は土佐光信に歸してゐる。然るに倭錦は後者の兩卷をも行光となしてゐる。今此兩卷を土佐光信筆となすことは、光信筆として信憑せらるゝ帝室博物館藏淸水寺緣起に照す迄もなく論外である。只行光說は之が同じく行光筆と傳へられる弘安本天神緣起に畫趣年代相若く點から一脈の興味はあるが、行光は貞治頃の畫家と考へられ、時代に開きがある。又弘安本の傳稱も亦享保六年土佐光芳の鑑定が恐らく俑をなすものであつて、何等根據となすに足りないのである。

然らば繪は先づ幾筆に分れるか。筆者は全卷一筆と考へる。而してそれは現在摸本のみによつて窺ひ得る興福東大兩卷原本にも通ずるものとして認められる。各卷の繪樣について見るに。興福東大兩卷は平淡なる堂塔の描寫に終始し、點景の人物も比較的小さい。延曆寺卷は山上に點在する堂舍、樹林、溪谷を霞の中に隱顯せしめて殆ど自然描寫に盡きる感があり、園城寺卷は建築描寫に併せて田樂の場面人馬の列を描く等先づは人物本位であり、人物も比較的大である。東寺卷は堂々たる東寺伽藍の描寫に始り、塔婆林立する蕭條

たる高野奥院の景觀に終る。久松家藏卷は人物描寫に活趣を見せ、人物は比較的大きい。根津家藏卷は建築と人物の配合であり人物は比較的小さい。かくの如く各卷はその取材と描寫に於て夫〻幾分體を異にし、更に色彩に於ても園城寺卷は最も絢爛に、久松家、根津家の兩卷は文様等にも墨一色が多く、最も簡素であり、筆致に於ても、延暦園城及東寺卷前半は描線が概して暖かく豐かな落著きがあるに對し、久松家藏卷は描線に自由さが目立ち暖かさを失ひ、根津家藏卷は更に乾燥せる趣が感ぜられる。又巧拙の側から云つて、東寺卷の建築描寫は根津家藏卷のそれに比して題材にもよるが相當の高さにあり、自然描寫に於ても延暦寺卷の陰影は東寺卷の粗末さに對應せしめられる。かく全卷に亙つて概觀する時各卷夫〻幾分の畫趣の相異はあるが、更に精細に點檢する時、人物の顔面の描寫、衣文の取扱方、大まかに土坡を描き了る曲線、伸々とした樹木描法等夫等を辿つて行けば各卷には寔に血管の如き描線の脈絡があつて、全卷一筆に成るものと認めざるを得ない。上に觀察せる如き畫趣の相違は例へば園城寺卷の色彩の絢爛は「去年に增して美しき田樂の裝束」を描けるがためであり、久松家卷の色彩に乏しきは一向衆の墨染の衣の描寫にあるが如くその題材によることも一原因ではあるが描線に示された或程度の差異も畫家の氣持その他によると考へられ寧ろ一畫家の振幅を示すものとして興味がある。

全卷一筆と認めて、扨て吾々は行くとして可ならざるなきその畫家の規模大なるに驚かざるを得ない。比叡山の描寫は連綿約十二米、堂舍樹林溪谷を連綴するに多く霞を以てするが、その霞は畫技拙劣を韜晦し去る手段ではなく、逆に此畫家は霞そのものに興味を持つて、雲烟多き山上の明暗を描いてゐる。例へば小徑に沿ふ木立の上半は墨描を殘して、その上を群青を以て淡く掃く類であつて、霞の繪として大和繪の中に殆ど獨自の位置を占めるかとすら思はれる。又東寺の建築描寫は堂々たる定規引を以て落著ある大伽藍を描き、四五の人馬を點じて大伽藍の靜けさを釀し出す手腕も確かである。更に久松家藏卷の一遍とそれを取卷く群衆の活寫に於いて人々は又刮目せしめられるのであらう。而して更に云ふべきはその畫技に應ずる畫品であつて、大和繪特有のおつとりとした氣品が鎌倉末期の繪卷としては珍らしい格致をもつて現はれてゐるのは見逃し難い。

以上の考察によつて吾々は最早この畫を序文に云へる如く永仁四年當時の作として認め得ると思ふが、更に當代の他の繪卷との比較を試み、その位置を今少しく明瞭にして置く必要がある。先づ此繪卷を正安四年の歡喜光寺本一遍繪傳に比べるならば、彼が新來宋元水墨畫の強い影響下に立つに對し、之は明確に大和繪正統の嫡男である。延慶六年の春日驗記はその絹本なると作り繪風の混じたることによつて暫くおき、正中年間の石山寺緣起に比較する時流石に樣式に一脈の近似はあるが、彼は年代の下降に伴ふ樣式の硬化を示し、畫格亦一段の低さを示す。弘安本天神緣記は全卷の複製もなく精細なる比較を行ふことは出來ぬが、吾々は寧ろ永仁より遡つた此弘安本に於て或ひは最も近似を見出し得るかと思ふ。と云つても、もと

より古人の鑑定に從つて兩卷を同筆と見做すものではないか、此兩者の近似は又天狗草紙を永仁四年と云ふ明確なる年代に於ける大和繪正系の畫風を示すものとして認めしめるに庶幾い。

九　書入—畫家の位置

繪の中に詞を書入れることは古く華嚴緣起等にもあり、鎌倉末期以後に於て特に盛行を見、此繪卷と近接せる時代にその原本が出來たと考へられ又同じく天狗を題材とせる是害房繪詞も亦その一例であつて、此繪卷に書入があることそれ自身には別に不思議はないが、しかし此場合に於ては、普通の場合のやうに單に物語の筋を助けるがためとか、興味を一層强めるための書入とは趣を異にし、先に考察せるところによつても明かな如く（第七節參照）此繪卷に於ては繪は詞書の內容を繪解きするものではなく、獨立にそれ自身の分野を持つて居り、書入なくしては繪が何を意味するかをも理解し難い場合が甚だ多いのである。このことは書入が最初から存在しなければならないことを裏書するものではあるが、書入は殆ど全く意味のない落書的なものをも含み、それ等も亦當初のものであるか否かによつては書入そのものゝ多方面に亙る史料的價値の高下以外に此繪卷の性格考察の上に重大なる影響をもつであらう。

實跡について見るに、繪中の書入は少くとも二度に分れて書かれてゐる。東寺卷にある「淸瀧」なる註は祠殿の屋根に檜皮の色を四角に拔いて書かれて居り、その施工より見て彩色以前の書入と認める他はない。このやうに彩色を拔いた例はこれ一つよりないが、（但し延曆寺卷には記憶なし）彩色前の書入れが之のみとは考へ難く、再見しなければ斷言出來ぬとしても、この例より推して殿舍等の名稱を註記せる比較的大字の分は大體彩色以前と考へられるものであらう。彩色以後に書入れられた最も明かな例は久松家藏卷の卷末に於て一天狗の科白が軸紙に亙つて書かれてゐるのに見出される。（繪の霞は軸紙に及んでゐない。）而して多くの比較的細字の書入が後者の場合であることは殆ど疑ひがない。しかるに、それ等書入は色彩の前後を問はず、筆跡の脈絡を辿れば全卷一筆と認められるのである。從つて書入全部を後入ではなく當初よりのものと認めざるを得ない。かくて書入は繪と緊密に結付くことになる。

玆に於て、此書入そのもの（同時に繪そのもの）と詞書作者（卽ち此場合は繪卷計劃者）との關係が問題となる。第七節に於て考察した如く、此繪卷の詞と繪との關係は普通の場合と異り、兩者夫〻截然たる自己の分野をもつて計劃されたものとすれば、書入は當然詞書作者との關係に於て先づ考へられなければならない。然らば書入は詞書作者のものであらうか。否、事實はそうでない。實跡の示すところによれば、書入は上述の如く彩色の前後少くとも二度に亙つて書入れられてゐる事實は、それ自身、書入が畫家の筆蹟に他ならぬことを物語る。然りとすれば、詞書作者が繪樣を指摘して一々文句を指示して畫家に書入させたものであるか。そんなことは出來るものではない。繪を畫家が書いたと同樣に書入も畫家が入れたこ

とは動かし難い事實である。しかも繪は單なる挿圖ではなく、最初から詞書に對立する分野をもつて計劃されたものである。果して單なる一繪師が、かゝる詞書作者に協力する、識見をもつてゐるであらうか。他の場合は知らない。しかし此場合は可能である。何故なら、次章に於て述べるが如く書入の事項はすべて僧侶が天狗であることの當代の諸相であり、畫家目睹の事實である。それを捉へ來ることは詞書作者の或程度のプランの指示さへあれば、あとは畫家の自由なる裁量に任せ得るものである。かゝる觀點に立つてこそ初めて、久松家藏卷が最も活氣に滿ちてゐることも東寺卷の如き天狗の出て來ない卷のあることも理解出來るし、又本筋に何等の關係なき末梢的な落書の介入をも說明し得るであらう。此繪卷が最初から上述の如き企劃の下に成立したことに何等の矛盾が感ぜられない。

一〇　出　典

興福寺卷乃至東寺卷の緣起文的內容及び根津家藏卷の宗論的內容の批判は繪卷の作者を考へる上に重要なる事項ではあるが、遺憾ながら筆者多く云ふ資格がない。專門家の敎示に待つ所多大である。

久松家藏卷の五つの話の出典に就いて云へば、第二段の說話は今昔物語卷第二十に「伊吹山三修禪師得天狗迎語」、宇治拾遺卷第十三に「念佛僧魔往生事」及十訓抄に「可專思慮事」の第二話として收錄されてゐるもので、直接にその何れによつたかは明かでない。他の四話については明瞭にそれと指摘し得るものは知らぬが、各詞書の樣子から考へると、作者の意圖によつて或る說話が更改せられたと見られる節がないでもない。左樣な觀方からすれば、第一段三井寺僧天狗に鼻を切らるゝ話は、古今著聞集卷第十七の大原の唯蓮坊が硯箱の小刀を以て天狗の腕を切つた話に、第三段丹波國篠村の僧の話は宇治拾遺卷第一の「丹波國篠村平茸生事」に、第五段天狗穢多童子に取殺される話は十訓抄「可施人惠事」の第七話（今昔物語卷十九闕文の「比叡山天狗報助僧思語」）に夫〻ある關聯をもつものかと思はれ、殊に最後の十訓抄の話は又第三段の內容とも或關聯があるらしく思はれるのである。而して第四段一向衆放下僧等の振舞に至つては、作者眼前の世相であらう。

書入の事項の一々に就いて歷史的事實と照合することも亦筆者の任でないが試みに二三を云へば。園城寺卷の三院會合僉義の場及延曆寺三塔會合僉義の場の書入は、史上有名な文應元年正月四日の園城寺戒壇勅許に關するその前後の兩寺僧徒の爭鬪乃至强訴を描くものである。根津家藏卷の蓮華王院炎上に關する書入は恐らくは建長元年三月二十三日の京師大火に係る。（大日本史參照）久松家藏卷に見る一遍は正應二年寂。（一遍の顏貌は一遍繪傳のそれと共通し最も寫實的である。畫家の實見にもとづくことは明かである。）自然居士は同名の謠曲に名高いが、南禪寺大明國師（正應四年寂）の法弟であつて、正安二年迄は在世のことが知られ、（日本名僧傳）何れは畫家目睹の人物である。又東岸居士の如き同類の門弟を持つてゐる。

之等を以て推せば、書入の事柄は粗〻畫家自身の現實に經驗したと考へられる事實に限られてゐる。このことは一面前節に述べた如

藏氏謨定松久　爵伯　媛愛

紙　草　狗　天

藏氏謨定松久　爵伯　媛愛

紙　草　狗　天

藏氏謨定松久　爵伯　媛愛

紙　草　狗　天

藏氏謨定松久　爵伯　媛愛

紙　草　狗　天

藏氏謨定松久　爵伯　媛愛

紙　草　狗　天

藏氏謨定松久　爵伯　媛愛

紙　草　狗　天

く詞と繪との分立を説明する上に重要であるが、他面、畫家の環境、永仁四年當時の畫家の年齢の推定に役立つものとして又重要なる意義をもつ。

一一　性質—歴史的位置

以上考察し來つたところは主として天狗草紙の構成に關してゞあるが、吾々は此繪卷が他に異つた異常に複雜なる性格を持つてゐることを知つた。此の繪卷を詞と繪とを含めて全體としての内容を見る時、緣起文學にして然らず、諷刺文學にして然らず、遊戯文學にして然らず、說敎文學にして然らず、而してその總べてゞあるところの複雜なる性質を持つてゐる。之が發生の原因を考へれば、(一)當代に於ける緣起繪卷の盛行、(二)諸々の說話集に見える多くの天狗話への興味、(三)沙石集弘安六年成卷八「天狗之人眞言敎事」の條に見える如き天狗と我執憍慢とを結付ける思想の存在、(四)當代宗敎界の墮落(古宗敎徒の憍慢なる行狀の樣々、新興宗敎徒の異樣なる振舞)に對する不滿(五)因果應報の思想、等を擧げることが出來るであらうが、此繪卷の内容に卽してその製作動機を考へる時、甚だ漠然とした目的意識より感ぜられない。今畫家にのみ關するらし最も遊戯的なる書入を分離して考へれば、幾分明瞭なる企圖が所在することは分るが、それにしても全體を支配するものは遊戯的なる宗敎文學と見らるべきものであらう。それはそれとして、此繪卷は上述の如く、前代よりのあらゆる要素をこゝに凝集し、更に後代への發展の素因を孕むものであつて、その意味に於て繪卷物史上他の如何なる繪卷にも比することの出來ない獨自なる記念碑的作品である。しかもそれを永仁四年と云ふ明確なる年時に定置して考へ得ることは獨り美術史家の喜びにのみとゞまらないであらう。

最後にかゝる繪卷の作者を知り得ないことは筆者の遺憾とするところである。しかし上に觀察し得たところによれば此繪卷の畫家は或程度の高さの位置をもつてゐたことが知られ、その畫技に於ても當代一流の畫人であり、詞書作者も或ひは二人以上であつたとの推定も可能であるかに見られ、詞書が數筆に分れてゐる事實は少くとも數人の協力に成る製作と考へらるゝよりすれば、自づから其處には相當大きい社會的背景を持つた或る一群(グループ)の存在が考へられ、更に詞書内容の分析によつて、作者が歸納的に推定し得るに至るやも知れない。壒囊抄に云ふ遍融七天狗の繪を作つたと云ふ八坂の寂仙上人とは如何なる人か知りたいと思ふが、此書は文安二年僧行譽の編せるもので、永仁を遙かにへだゝるものとして、此遍融七天狗繪なるものは或ひは別本であるかも知れない。

一二　結　語

玆に一先づ天狗草紙の考察を終る。書きゆくまゝに、最初の計畫に變更を來し構想甚だ不備のものとなり、述べて甚だ意を盡さず、多くの問題をも殘した。切に御判讀御高敎を希ふ。

擱筆に當つて、調査の便宜を與へられた、博物館當局、各所藏家

及秋山光夫氏、田中一松氏に深甚なる感謝の意を表する次第である。

天狗草紙法量表（單位糎）

料紙第一	博物館藏（摹）興福寺卷	博物館藏（摹）東大寺卷	博物館藏延暦寺卷	前田侯藏園城寺卷	博物館藏東寺卷	久松伯藏傳三井寺卷	根津家藏傳三井寺卷
堅	三〇・一	三〇・一	二九・四	二九・四	三〇・〇	二九・八	三〇・七
二			五一・二	五二・五	五一・〇	四五・五	五一・三
三			二九・一	五一・五	五一・六	五一・一（繪一）	五一・一
四			五一・五	五二・〇	五一・二	五一・五	五一・二
五			四七・〇	五二・二（繪一）	五一・八	五一・一（詞二）	五一・二
六			四三・〇	五二・一	五一・九	四〇・五	五一・四
七			五一・二	五一・八	五二・〇	五一・一（繪二）	五一・三
八			五〇・九（繪）	五一・九	五一・六	五二・〇	五一・一
九			五一・九	一九・九	五一・五	四〇・三	五一・五（繪一）
一〇			五二・七	五二・二（繪）	四二・六	五一・五（詞三）	五二・一
一一			五一・八	五二・三	五一・二	五〇・七	五二・一
一二			五二・五	五二・七	五一・八	五〇・六（繪三）	五二・〇
一三			五二・一	五二・五	五一・七	五〇・五	五一・八
一四			五二・一	五二・一	五一・二	五一・三（詞四）	五一・二（詞二）
一五			五二・四	五一・六	五一・五	四八・九	五一・五
一六			五二・一	—	五〇・九	五〇・二	五一・六
一七			五二・七		五一・二	五一・六（繪四）	五一・五
一八							
一九							
二〇							
二一							
二二							
二三							
二四							
二五							
二六							
二七							
二八							
二九							
三〇							
計	二五〇・三	四七〇・〇	一九六・九	七四八・九	二四九・四	三九三・一	一〇三〇・一

備考一、各卷高さの相違は傳來の分散による改裝の際の切斷による。

一、興福東大兩卷の高さは、摸本に示された原本の高さに依る。摸本そのものゝ實際の高さは各三五・四糎。